昭和三十一年に於ける国語学界の展望

国語史

福島邦道

ことばブームと言われた三十一年度は、「国語史」関係の論文もおびただしい数であった。量的にばかりでなく、質的にも力作が見られ、その中には、よほどの年月をかけて吟味してみないと批評できないものもある。厳正な態度がゆきわたらず、ニュートラルな筆づかいが見られるのはそのためである。論文のとりあげかたで、興味の偏向による繁簡よろしきを得ぬところがあるであろう。また、とりあげたものが、国語史学プロパーに属すかと、シニカルに肩をすぼめるようなものもあるであろう。すべて筆者のさかしらのいたすところである。

現状では、文献目録などが不備のためか、目にふれ難かったものがあるにちがいない。思うに、「中世文学」（脱漏はあるが）のような機関紙がでることが望ましく、平安文学に関するものにはその必要が痛感されるのである。

編述の方法については、考えあぐねたが、結局便宜に従ってしまっている。内容によって類聚したことが多く、もとより「万葉集」の項目に収めたものでも、その及ぼすところ、「古典文法」全般に関するもののあることは言うをまたない。

総記

日本語の系統については、泉井久之助博士「言語の研究」（有信堂、六月）の中に、既発表のものではあるが、南北に比定すべき実例をあげて、有力な、慎重な発言が見られる。村山七郎氏「万葉語の語源――日本語の系統論に関連して――」（解釈と鑑賞　十月）は、北方語との関連について、新例による知見が示されている。なお、史学関係で、古代日本語と朝鮮語と無理に結びつけたものがあり、また「朝鮮学報」には、朝鮮語関係のものが見うけられるが、省略に従う。ともあれ、日本語と朝鮮語との関係については、安易な比較論でなく、深くたずねなければならない問題があるのである。例のレプチャ語については、大野晋氏「レプチャ語はどんな言葉か」（文学、三月）、柴田武氏「日本語の祖先はレプチャ語か」（三省堂、学校通信、六月）、鬼春久氏「安田徳太郎博士著『万葉集の謎』の批判――レプチャ語と日本語との関係――」（言語研究、三十号、九月）などがあった。大野氏のは、レプチャ語と上代語との語彙に類似のいちじるしくうすいことを説いている。

音韻関係では、服部四郎博士「入門講座　音韻論（二）」（国語学二十六輯、十月）は、亀井孝氏との論争のつづきで、中世のハ行音、チツヂヅの音価などについて、音素体系からの解明がなさ

れ、その共時論的な根拠は十分に尽してはある。浜田敦氏「ガ行子音」（国語国文、二月）、亀井孝氏「ガ行のかな」（国語と国文学、九月）で、浜田氏のは、現在の語頭g・語中ŋの発音は、中世末のgとᵑgとをうけついだことを音韻論的に明らかにし、亀井氏のは、古代語にも現代語のようなgとŋとをみとめようとの論証である。ともに橋本進吉博士説の揚棄の形はとっているが、まだ問題は残ろう。浜田敦氏「音韻論的解釈」（国語学、二十四輯三月）は、音韻史の問題にもわたり、サ行音・タ行音についての記述がある。金田一京助博士「『表音仮名遣は仮名遣にあらず』」（国学院大学、国語研究、五号、十月）には、表記と音韻の問題から、ⁿdなどの鼻濁音の現象をとりあげ、この国に古くからあったものとしている。大友信一氏「『捷解新語』に見られる濁音表記」（言語研究、三十号、九月）も、要旨ではあるが、これに関連し、initial-glideなどについて論じてある。横山辰次氏「国語に於ける頭音脱落の現象」（文芸研究、二十三集、七月）は、「いまだ」「まだ」などの用例をひろくしらべ、母音音節の落ちるのが特に多いとしている。急逝が惜まれる。亀井孝氏「音便名義考」（一橋大学研究年報、社会学研究1、十月）は、従来安易に考えられていた「音便」の概念につき、新資料の援用による精到の論で、その及ぼす影響もはなはだ大きい。

アクセントでは、岡田尚子氏「日本書紀古写本のアクセントと古今訓点抄のアクセントについて」（大阪女子大学、女子大文学、八号、三月・九号、十二月）は、二号つづきの論文で、秘籍大観収載の日本書紀アクセントと古今訓点抄のそれとのくわしい調査から、平安から鎌倉にかけてのアクセントの推移をさぐったものである。両者の型の異動についてはいちじるしい新事実の発見はないが、精査した語彙の一覧は、後の研究に大きな便益を与えるものである。桜井茂治氏「『仏遺教経』の旋律に反映した国語のアクセント」（国語学、二十七輯、十二月）は、「仏遺教経」のアクセント体系が院政末のアクセントを反映していることを証したものであり、同氏「近畿アクセント下上型名詞甲・乙類別発生の再検討――声明の旋律に反映したアクセントを資料として――」（国語研究、五号、十月）は、「四座講式」のアクセントから下上型名詞の別の発生したわけを考察したもので、ともに、資料の少い当期で、その資料的価値を明かにしたものである。たゞ「声明」の時代については小西甚一博士の論のあることである。南不二男氏「名義抄時代の京都方言に於ける二字四段活用動詞のアクセント」（国語学、二十七輯、十二月）は、名義抄のアクセントと高知方言のとをくらべたもので、名義抄に下上甲・下上乙型の別のあったことを推論したもので、方法論もするどい。和田実氏「伊勢本古事記の声点」（国学院雑誌、十二月）は、伊勢本系三本によって調査したもので、これが、平安ないし鎌倉期までのアクセントの姿をとゞめていることを認めたもので、いつもながらの堅実な論である。

漢字音には、まず、奥村三雄氏「日本漢字音の体系」（訓点語と訓点資料、六輯、四月）がある。漢音・呉音・唐音などの対照図表で、図表の学も「隋唐音図」からここまで進んできている。吉田金彦氏「新譯華厳経音義私記の反切について」（静岡女子短期大学紀要、三号、十二月）は、最古の音義で、倭訓の利用されることの多かったものだが、その反切を綿密に他の韻書などとくらべ

てしらべあげたものである。なお、平安時代に行われた反切については、馬淵和夫氏「反切の方法について」（国語研究、五号、十月）があり、従前の説を正している。小松英雄氏「日本字音における唇内入声韻尾の促音化と舌内入声音への合流過程――中世博士家訓点資料からの跡付け――」（国語学、二十五輯、七月）は中世において「接（セツ）」などが「セツ」と発音されるに至った経過を例証し、新領域を開いた力作である。頼惟勤氏「漢字の上古音について」（大修館、漢文教室、二十四号、五月）・「漢字の中古の韻について」（漢文教室　二十五号、七月）・「万葉仮名と中国字音史」（解釈と鑑賞、十月）は、日本の上代音・漢音・呉音などの漢字音を研究する上にそれぐ有益な論である。中国では、王力氏「漢語音韻学」（再版）があったと聞いている。

文法史関係のものは多かった。石田春昭氏「動詞変格活用成立論」（国語学、二十五輯、七月）は、変格活用の起源についての仮説であり、新しい方法論に立脚したものである。時枝誠記博士「日本文法　文語篇」（三月、第二刷、岩波書店）の、巻末「注意すべき動詞活用例」は、重要な語例をあげ、きわめて有益である。宮地幸一氏「動詞『乱る』から『乱す』への漸移相」（国学院雑誌、五七巻七号、十二月）、「動詞漸移相の研究　(一)」（国語研究、四号、三月）は、氏が長年手がけている動詞の活用形の推移についての研究であって、「乱る」から「乱す」へ、「生く」「生くる」「開く」「開くる」などの、上代より中世へのうつりゆきを巨細に列挙してある。たゞこの種の仕事では、訓点資料などからの言及もほしいところである。西尾光雄氏「サ変動詞『す・する』の補助的用法序説」（都立大学、人文学報、十三号、二月）は、並立していう「……たりする」の言い方についてであるが、歴史的な見通しを持つもので、続稿が待たれる。佐伯梅友博士「『にあり』から『である』へ」（国語学、二十六輯、十月）は「に存在する」の意の「なり」「にて」「にてあり」の用法についてのべたもので、これは従来手のゆきとゞかなかった問題である。三宅清氏「古歌と古語―古代文化の研究」（東京大学教養学部、人文科学科紀要、第九輯、六月）には、過年度問題のあった「申したまふ」「らむ」についての再論があり、論旨もとおり、きわめてくわしい。竹岡正夫氏「助動詞ナリの表わすもの――助動詞の意味の検討――」（国語学、二十五輯、七月）は、「なり」論争につながるもので、伝聞・推定をみとめないで新しい意味づけをするものである。たゞし両氏の論には、立場の相違などから異論はでよう。なお「なり」については木之下正雄氏の論（後述）もある。大野透氏「ベシ・ベカラズ・マシジ・マジについて」（国語学、二十五輯、七月）では、これらの推量の助動詞の意味的推移や位相を上代中古についてしらべてあり、「べからず」にくわしい。助詞では、青木伶子氏「『へ』と『に』の消長」（国語学、二十四輯、三月）は、助詞「へ」「に」の相違、「へ」が目標から場所を示すことの経緯などについてで、鋭意研究中の助詞史から多くの用例で解明したものである。此島正年氏「古代における格助詞『が』」（国学院雑誌、十二月）は、格助詞「が」が人に関する体言をうけることや例の「が」が軽卑をあらわすことの再認である。後者については森野宗明氏の論（後述）もある。丸山嘉信氏「が考――終助詞表情の問題として――」（同上）は、連体形をうける格助詞「が」や「がに」「がね」についてで

同氏「終助詞表情の一考察――体言相当格を承ける『が』をめぐって――」（芸林、七巻六号、十二月）の、後半は前の論と関し、前半は、格助詞「が」のもつ文構造で、石垣謙二流に考えてある。なお「がに」「がね」にはさきに佐伯梅友博士の論があった。田中健子氏「疑問表現形式の史的変遷――会話文を中心として――」（語学文学、創刊号、九月）は、疑問語と係助詞とからなる表現形式の変遷をたずねようとしたものであり、竹尾正子氏「係結について――古代和歌より現代和歌へ――」（福岡学芸大学久留米分校紀要　六巻、二月）には、諸説が並べてある。大久間喜一郎氏「意味と語法――顚倒表現の場合――」（文学研究会文学研究、十三号、七月）は、漢文の訓法や格助詞「の」による顚倒表現を考えたものだが、顚倒と見ない人もいよう。塚原鉄雄氏には、「鎖型構文」（平安文学研究、十八輯、五月）があり、「その手はくわなの焼き蛤」型の両方へかゝる文体を考え、（後述「なにはのうら」参照）また、「異質的な文体の融合――引用文と地の文――」（明日香路、二月）・「挿入法の文法的機能」（明日香路、十月）などもあり、文体の構造をするどく追求している。阪倉篤義氏「一つの疑問」（文学史研究会　文学史研究、二号五月）は、古代文学も古代語意識で理解してはとのことが見え、湯沢幸吉郎博士「現代語雑考」（国語研究、四号、三月）では、現代語の言い方に中世近世の古例が引用してある。村田鈴子氏「懸詞のもつ言語的性質の一部――懸詞使用上の混用について――」（解釈、二月）、木原茂氏「複合名詞の意味」（解釈、二月）もあった。「助詞の歴史的研究」について、池上禎造氏（文学、七月）松尾拾氏（国語学、二十五輯、七月）青木伶子氏（国語と国文学、六月）の三氏によりそれぞれ特色ある書評があり、石垣氏の偲ばれることである。「国学院雑誌」五七巻七号（十二月）には、武田祐吉博士古稀記念号として文法関係の論文十数篇が収められている。湯沢幸吉郎博士「近代国語の研究」（文部省、学術月報、九巻二号、五月）は、博士の三大著書「室町時代の言語研究」「徳川時代言語の研究」「江戸言葉の研究」の四十余年にわたる研究経過を語ったものだが、これは三十一年度学士院賞の対象になったものであり、国語学者として、大矢・春日・有坂三博士についての授賞である。

敬語には、「国文学　解釈と鑑賞」五月号が「敬語――変遷と現代の課題」を特集し、石坂正蔵氏（奈良時代）玉上琢彌氏（平安時代）塚原鉄雄氏（鎌倉・室町時代）山崎久之氏（江戸時代）があった。頁数の関係かお座なりめいたものもある。時枝誠記博士「言語における伝言者の立場について――祝詞・宣命における『衆聞宣』の訓義に及ぶ」（国語学、二十七輯、十二月）は、話手聞手の考察から敬語「宣」の訓を考えたもので、言語過程説が理論だけに終始するものでないことをよく示している。山崎久之氏「待遇表現体系研究序説」（群馬大学紀要、人文科学篇、五巻八月）は、未完ではあるが、山崎氏の一筋につき進めている問題で、近松狂言本二十三篇を中心に、複雑な待遇関係をしらべたものである。

語彙では、宮嶋弘氏「トンボの古語の語源」（立命館文学、一二九号、二月）は、「アキヅ」を「齧づ」、「カギロヒ」を「炫る」などと考えたもので、挙例も多い。大安隆氏「形容詞『大きい』の系譜」（関西大学、国文学、十六号、六月）は、「大きい」が、

形の上では「大きに」「大きなり」から、意味の上でも種々に変遷したことをこまかく論じている。山田忠雄氏の精考「『するどし』の成立」なども参照されたい。大野晋氏「基本語彙に関する二三の研究――日本古典文学作品に於ける――」（国語学、二十四輯、三月）では、語彙の品詞別の比較統計より、その用いられた作品のジャンル・性格なども推定できようとの論で、精細な調査によっている。すでにこの論の影響もあらわれてきている。中川浩文氏「中古の文芸作品における形容詞――その一の一、語彙篇――」（京都女子大学紀要、十三巻、九月）は、竹取・伊勢・土佐などの全形容詞を統計し、相互に比較したものである。女性語では、杉本つとむ氏「女房詞の系譜」（早稲田大学、国文学研究、十四輯、十月）があり、狂言・消息の女房詞と女中詞についてであり、就中、近世語の扱いは出色である。「婦人語の研究」の真下三郎氏に「江戸時代における女性の生活とことば」（言語生活、一月）もあった。外来語関係では、「ことばの生い立ち――ことばの研究室――」（日本放送協会編、講談社、九月）には奥野信太郎氏「中国から来た言葉」、楳垣実氏「西洋から来た言葉」、広田栄太郎氏「訳語あれこれ」、金田一京助博士「アイヌから来た言葉」、辻直四郎博士「インドから来た言葉」、新村出博士「やまと言葉」をおさめ、総頁、百九十頁。奥野氏のものはほぼ半数を占め、中国文学者の立場からの立言で参考にすべき点が多いが、いかがわしいものもあるようだ。広田氏のは、未開拓のところで要を得ている。NHKのこころみとして高く買いたい。新村出博士著「言葉の今昔」（河出書房、一月）は、かつて「語源をさぐる」として発表されている。石綿敏雄氏「元禄時代の外来語」（言語生活、七月）は、近松などのつかった外来語をよく考証してあり、楳垣実氏「外来語の歴史と特質」（言語生活、七月）もあった。

文章史関係では、江湖山恒明氏「日本文章史」（河出書房、四月）がある。漢字文・漢字仮名交じり文と分け、さらに散文・韻文に分けて考察したもので、「国語表現論」の行き方で、類書も少く、特色のあるものだが、とりあげた文章様式などについては、批判される面もある。根来司氏（国語学、二十五輯、七月）西尾光雄氏（国語と国文学、九月）の書評がある。小倉学氏「宣命書について」（国学院雑誌、十二月）は、上代・中古における宣命書の様式を例示したものである。佐藤喜代治氏「文章研究の意義と方法」（国語学、二十五輯、七月）は、仮名交じり文の語彙語法上の特徴をとらえて、今後の文章史研究のあるべき方向を示している。浅野信氏「特殊な主体の系譜――その文章史における――」（国学院雑誌、十二月）では、いろ〳〵な助詞によって、その文章の「主体」があらわされていることを、新古各種の引例で示しているが、やゝ多岐である。橋本四郎氏「里見八犬伝の文体とその文語――文語史研究の基礎として――」（国語国文十一月）は、馬琴の特殊な語法をたずねたもので、この種の、一文体における異質な文体の混在についての研究は、まことに有意義なものである。村田敏子氏「言文一致体小説創始についての美妙の考え方」（お茶の水女子大、国文、六号、十二月）には、創始者の意識が問題となっている。なお「国語・国文」二五巻一一号（十一月）は「表現と文体」を特輯している。

文字では、遠藤嘉基博士「醍醐寺五重塔の戯書」（国語国文、

六月）は、昨年五月発見になる最古の片仮名文で、資料価値も高い。二面の中、その一面を解読したものである。山田忠雄氏「漢数字の書法――文字論のためのおぼえがき――」（日本大学文学部研究年報　昭和三十年度、三月）は、漢数字で「三百四十六」を「三四六」と書く書法のあることを、和漢の古書について精査したものであるが、七十四頁、視野も広く、一読再読まことに学問のきびしさの身にしみることである。

国語史全体にわたるものでは、時枝誠記博士「現代の国語学」（有精堂、十二月）には、「国語の歴史的研究」の章がある。既往の研究も総観してあり、国語史へのよき手引をなしている。池上禎造氏「日本語の発達」（「ことばの講座」、五月、創元社）は、倒叙のこゝろみをとっている。小川洋介氏「国語史感想」（山形大学、国語研究、八集、二月）もあった。

塚原鉄雄氏「国語史学史の立場から見た日本歌学の誕生」（国語国文、四月）、塚原鉄雄・塚原幸子両氏「紀貫之序説」（芸林、七巻五号、十月）には、古語がどんなふうに過去において認識されたかという興味ある問題をとらえ、ほり下げている。それぞれ「国語史学史」の一をなすものだが、私にはやゝ難解なところもある。鈴木一彦氏「漢字への置き換えによる解釈方法をめぐつて」（山梨大学学芸学部研究報告、七号）は、中世人が和歌の語をいかに漢語におきかえたかをしらべたもので、表現過程を明かにするとともに、中世における国語意識の一問題である。

資料などについては、まず、山田孝雄博士「典籍雑攷」（宝文館、十二月）がある。解説を集めたもので、「典籍説稿」の続編をなし、古文献を扱う上に益するところが多い。貴重古典籍刊行会（一誠堂）では第二期として、「大東急文庫本　今昔物語集残簡　井関根博士旧蔵本」・梅沢本中納言顕基事」（六月）がはじめて全貌をあらわし、昨年につづき「東松本　大鏡　第二」（十二月）があった。古典文庫では本年度は、「方丈記　兼良本」（四月）・「平語偶談」（八月）「未刊中世小説四」（九月）・「連歌論新集」（十二月）・「和泉流狂言集」（二月・十月）・「古浄瑠璃集」（十一月）・「歌舞伎狂言集」（三月）など十二冊で、総数百十三冊を数えるが、これらの稀覯書を親しく手にできる利便は大きい。その他の資料については各時代の関係項目で言及したい。

上　代

音韻関係には力作が見られた。北条忠雄氏「上代国語に存する母韻転換の考察――それから導き出される諸問題――」（秋田大学学芸学部研究紀要、六輯、二月）は、母音転換の現象から上代語法をも解明しようとする意欲的なもので、細部には問題はあるが、北条氏の古くからの研究テーマで、用例も多く、見るべき論である。泉井久之助博士「上代日本語における母音組織と母音交替」（京都大学文学部五十周年記念論集、十一月）は、今までの安直な母音調和などの考えを再検討し、母音の結合関係から母音組織を図式として論理的にきわめ、また母音交替を分析したもので、上代音研究に大きく寄与しよう。春日政治博士「国語の母音同化」（九州大学、語文研究、四・五号、十月）にも、上代語の母音交替現象が扱われてある。福永静哉氏「先行母音よりするイ列乙類の性格」（京都女子大学、女子大国文、四号、七月）は、上代語の中で、例えば、キの乙類が母音アをうけて「伊波紀」

（石木）となるような現象を統計的にしらべ、作品の新古による推移がのべてある。G・ヴェンク氏 Notizen zur Manyogana für =/e/（Nachrichten, Hamburg. 1955）は、有坂・橋本両博士に論のあったア行のエの仮名についてで、資料をこまかく検し、琴歌譜・華厳経音義私記のものはエ音節の長音化手段であると結論づけようとしたもので、脚注にもあるが、氏には Japanischen Phonetik（1954）の大著のあることと、その概要だけでもうかがいたいものである。河野六郎氏の「『上代音韻攷』の書評」（国語研究、五号、十月）は、単なる紹介でなく、音韻史研究のあり方への道しるべである。なお、上代特殊仮名遣では、鶴久氏「上代特殊仮名遣の消滅過程について――『野』字の訓の変遷をめぐって――」（九州大学、文学研究、五十五輯、九月）は、綿密な作業による豊富な用例から、古くはノ乙・ヌのみでノ甲はないと断じて、大野晋氏説を批判したものである。たゞ引例の多い固有名詞の仮名遣は、亀井氏にも旧論があったが、論拠とするにむずかしい問題を蔵しているように思われる。池上禎造氏「上代特殊仮名遣の万葉集への適用と解釈」（解釈と鑑賞、十月）もあった。

文法では、木下正俊氏「上代敬語動詞成立考」（万葉、十九号四月）は、「たまふ」「めす」「まゐる」などの語源・用法がくわしく論じてあり、時枝博士説の影響が濃い。この問題はなお論じ尽せぬことである。蔵中進氏「上代の形容詞――動詞との関連を中心として――」（神戸大学、国文論叢、四巻一号、十一月）では、形容詞と動詞語幹との関連などについて細密に吟味してある。有坂博士説への言及があったらと思う。浅見徹氏には、「『広さ』と『狭さ』――上代における連体格助詞の用法について――」（万葉、二十号、七月）・「『の』の歴史――その一として『上代』――」（国語国文、八月）・「祝詞と宣命における助詞の用法」（国語国文、十一月）の三論考があり、連体格助詞「の」「が」の用法や連体格助詞「の」が主語格助詞に変って行くことなどが考察してある。三宅清氏の反論（「『の』主格の発達について」国語国文、十月）はともかく、三つの中では、「『の』の歴史」が力もこもり興味がある。此島正年氏「古代の助詞『すら』について」（弘前大学、人文社会、一〇号、九月）では、「すら」の意味や「だに」との関係が明快に論じてある。遠藤嘉基博士にこれに関連する旧論がある。北条忠雄氏「係結法管見――コソ係結の本質と八丈島方言の係結法――」（秋田国語国文、一号、十月）は、上代の「こそ」の係結と副題についての試論で、異見もでよう。瀬良益夫氏「上代の感動表現『い』について――格助詞『い』の再検討――」（解釈、四月）は、肯えようが、先行の研究がある。村田光子氏「上代に於ける係助詞『は』『ぞ』の終止的用法」（福岡女子大学、香椎湾、創刊号、十一月）は、終助詞「ぞ」「は」の性格や「ぞ」と「なり」と関連をのべてある。

語彙では、藤岡幸三氏「『むすび』考」（滋賀大学、国語国文学、二号、十二月）には、上代語「むすび」と信仰の関係などがある。

資料関係では、西田長男博士「日本古典の史的研究」（理想社一月）がある。六百六十頁に余る大冊で、銘刀・隅田八幡の鏡などの古代資料から「古事記の仏教的文体」まで、上代語研究にとって参考すべきことがあるが、やゝ繁雑である。坂本太郎博士

（史学雑誌、三月）・田中卓氏（芸林、六月）の書評がある。山口角鷹氏「和訓古例」（東京学芸大学研究報告、七集、一月）には、大宝二年戸籍帳の人名和訓が分類してある。

古事記については用字関係のものが多い。門前真一氏「古事記『所御佩之』の御について」（天理大学、山辺道、二号、三月）は、三矢重松博士説の再確認で、「みはかせる」と訓むべきでないとの詳論であり、同氏「古事記における『聚』字の訓――宣長の敬語意識――」（天理大学学報、二十一輯、八月）は、「聚」の訓をこまかに調べ、また待遇関係によるつかいわけを論じたものである。山崎孝雄氏「古事記における『者』と『也』について」（国学院雑誌、五六巻五号、二月）は「者」「者也」などで終る用法をよく調べてはあるが、論旨がすこし弱いようである。小島憲之氏「接続の助字『爾』」（古事記年報、三、六月）は、前年に小野田光雄氏に論があり、さらに漢籍の用例をあげてある。文章では、小野田光雄氏「古事記の文章」（同上）があり、地の文、会話文の特徴を用字用語の統計からたずねた労作である。倉野憲司博士「古事記片々」（福岡女子大学、文芸と思想、十二号、七月）には、国語学的なことへの論及もあり、藤井信男氏「『ことをこそ』について」（解釈、九月）は、新解である。歌謡では、武田祐吉博士「古事記に於ける歌謡の伝来」（国語と国文学、七月）は、用字や仮名遣が考えてあり、西宮一民氏「記紀歌謡の比較――類歌を中心として――」（芸林七巻一号、二月）は、梅沢伊勢三氏の論をおし進め、両書の類歌や独自のものから差異に及んでいる。武田博士「記紀歌謡集全講」（明治書院、五月）には、新見も多い。真武直氏「古事記延喜式の同一地名異文同字に反映した中国語音韻学事象」（福岡学芸大学紀要、六号、十二月）は、地名仮名の漢字を韻書により分類し、その推移をみようとしており、綿密な調査であるが、方法論的に難点があろう。本年度から待望の「古事記大成」（平凡社）が刊行されることとなった。「研究史篇」（十一月）にある、古賀精一氏「古事記諸本の研究」は、資料を扱い、まさに圧巻である。

日本書紀では、小島憲之氏「上代人の文章――神代紀を中心として――」（国語学、二十六輯、十月）は、小島氏薬籠中の物たる漢籍出自の語や文章接続の様相を説き、小久保伍氏「神代紀の文章の一考察」（芸林、七巻二号、四月）には、用字の特徴や記との比較が見られる。福永静哉氏「日本書紀の清濁表記と中国原音との関係――」（女子大国文三号、一月）は、清濁表記の字音仮字で問題のあるものを調査比較し、中国原音とも関係づけた論である。原音については野村正良氏の調査もあった。資料では、書紀の私記についてであるが、西宮一民氏「日本紀私記甲本と書記」、西宮一民・鍛冶初江両氏「日本紀私記甲本漢字索引」（帝塚山短期大学研究年報、十一月）がある。書記と対比でき、和訓・声点もあり、利用価値も大きい労作であり、続稿が待たれる。

万葉集に関するものは、圧倒的に多く、雑誌「国文学　解釈と鑑賞」（十月）、「国文学　解釈と教材の研究」（九月）では、それぞれ万葉集を特集している。単行本では、沢瀉久孝博士「万葉歌人の誕生」（平凡社、十二月）がある。「作品と時代」につぐもので、重厚精緻の論文集である。既に発表されたものだが、「いはふ」「いむ」や「神風の」のように私などにはじめてのものもあり、論考で「訓話二題」は国語学上の問題が論じてある。伊

丹末雄氏「万葉集難訓歌研究」（補訂版）（一月、油印本）は、十五首の難訓歌について、堅実な手続きをとり著者の訓を示そうとしている。二百四十一頁、心ひかれる訓もある。続篇「万葉歌十五釈」（十一月、油印本）には、別の十五首の訓や解釈があり、五十八頁。文法では、大野晋氏「日本古典文法――その一『こそ』の係り結び――」二・三・四・五・六・七・八（解釈と鑑賞二・四・五・六・九・十一・十二月）は、「こそ」の係り結びを根本的に再検討し、この形式を時代・ジャンル・表現者の感情などから明晰に論じ、本年度は万葉の個々の用例についての適切な解が施されている。考え方に同じえぬ点はでることもあろうが、まことに好論文である。吉永登氏「已然形にヤの添うた形続考」（関西大学　文学論集、五巻一・二号、三月）は、前年発表した、すべて反語とみる論を、例歌の訳解から裏付けたもので、氏一流の精密そのものである。沢瀉博士や佐伯博士にも旧論があり、「や」のきれつづき、かゝり方をめぐっては問題はあろうが、一論として重きをなそう。足立滋乃氏「已然形の機能について」（国文、六号、十二月）は、已然形の用法がよくしらべてあるが、先行学説への反論は弱い。田辺正男氏「何（を）何み」（国学院雑誌、十二月）は、万葉文法の一問題であり、たんねんな調査から「を」を間投、「み」を形容詞連用形のはたらきとするもので、この語法研究者の必見すべき論である。後藤和彦氏「係助詞と条件句の関係について」（文学語学、二号、十二月）は、条件句を作る場合の上にくる係助詞「は」「も」の性格をよくしらべている。千田幸夫氏「推量表現」『らむ』の研究――その方法的序説――」（鹿児島大学、文科報告、五号、八月）は、前稿「『らむ』の表現性」につづくもので、「らむか」などから文学表現について考えている。佐伯梅友博士「万葉集の文法と語法」（国文学、一巻三号、九月）は、前稿「文の構成」につづくもので、連文節の問題である。林大氏「万葉人の言葉あれこれ」（解釈と鑑賞、十月）もあった。佐伯仁三郎氏「古代和歌における抒情用語の変遷」（和歌文学研究、創刊号、三月）は、抒情表現から語法的なことに言及している。

東歌では、上西繁氏「万葉集東歌の序詞」（神戸大学、研究、十一号、二月）は、既往の研究をふまえて、その特徴をとらえようとするもの。松田璹治氏「東歌に現れたる東国言語の特色」（秋田大学、国語国文学紀要、三輯、三月）は、特色がならべてある。

用字では、井上富蔵氏「大伴家持とその用字法」（岡山大学法文学部学術紀要、七号、十二月）は、一音一字式用字法についてしらべてあり、鶴久氏「万葉集における語・告・謂・言の訓――表現意識と用字法との関連において」（語文研究、四・五号、十月）は、これらの文字が通用しながらもその場に応じて種々訓まれうることを説いてあり、鶴氏の熱心にすゝめている訓法研究の一である。佐々木一雄氏著「万葉集訓法の研究」（好学社、十二月）は、漢文的な用字法をもつ訓について例示してある。

意味では、井手至氏「『しののめ・いなのめ』攷――原始的住居と『め』――」（万葉、二十号、七月）は、窓代りとして篠竹の目を考えようとする創意にみちた説。この国のこととしてはまだ些少の危険を感じよう。武田祐吉博士「『あち』の考」（明日香路、一月）は、「あぢ」「あぢさは」などについての考察。三

吉陽氏「ココダ私考」（愛媛国文研究、五号、三月）は、一連の「ここだ」「こきだ」などの変遷が論じてあり、森田虎雄氏「常滑考」（同上）は、著明な「常滑攷」に対しては弱い。丸山嘉信氏「『もとな』の用法」（徳島大学学芸紀要、五巻、二月）は、間投詞から副詞にいろ〳〵な形で発達し、適当する近世語はないとの論だが、私など、山田博士や武田博士の明快さにもどってゆく。ほかに、倉野紀子氏「『しらぬひ』考」（解釈、三月）、長江稔氏「『あやにかなし』と『見ればかなし』――万葉『かなし』考余滴――」（同、九月）、賀古明氏「『すべなし』考」（万葉茜会、万葉集研究、創刊号、三十年十二月）があり、小島憲之氏「万葉集歌の訓話をめぐって」（解釈と鑑賞、十月）もある。

一々の歌について見てゆこう。（タイトルの下に国歌大観の番号をつけてほゞその順を示す）大野晋氏「万葉集開巻第一の歌」（巻一・一）（文学、四月）は、新しく文法的に解明しようとするもの。吉永登氏「『渡津見の豊旗雲に』の歌の解釈を通して」（巻一・一五）（解釈と鑑賞、十月）には大野氏の論及もあった。尾崎暢殃氏「『何方御念食す』追考」（巻一・二九）（万葉集研究、創刊号）尾崎知光氏「『葉過去』補説」（巻一・四七）（解釈、十二月）関守次男氏「娵女の袖吹きかへす』の歌の解釈」（巻一・五一）（山口大学文学会志、七巻二号、十二月）では、この三句四句に、従前の説とちがった新しい意味をもたせようとするもので、是非むずかしいことである。田中佩刀氏「『我恋将息』考」（巻二・八八）（解釈、十月）。菊沢季生氏「『強作留行事乎』の訓み方について」（巻二・九七）（宮城女子大学研究論文集、十、十二月）は、「シヒスルワザ」と訓む論、高橋良雄氏にも論（学苑、一六二号）があった。市村宏氏「万葉考二題――『椎の葉』（巻二・一四二）と『遠けども見ゆとふ面影』（巻三・三六九）――」（東洋大学、文学論藻、五号、十月）。菊沢季生氏「万葉集巻二（一六〇番）の歌の訓み方について」（宮城学院会誌、八月）は、五句を「さかしををはこぶ」と訓む説で、この五句には、沢瀉博士「あはむ日をくも」（文学論集、三十年十一月）がすでにあった。伊藤博氏「人麻呂の挽歌一つ」（巻二・一六九）（解釈と鑑賞、十月）。佐竹昭広氏「人麿の反歌一首――意味論的考察――」（巻三・二三九）（万葉、十九号、四月）は、「あみにさす」の発想の根基をさぐる試論、大浜厳比古氏「『舟公宣奴島爾』私訓――万葉集結句中間切についての考察――」（巻三・二四九）（山辺道、二号、三月）では、中間切精査の功は大きい。沢瀉久孝博士「万葉集講話」十五（巻三・二五一）十六（巻三・三七六・三七七）、十七（巻三・三六一）（万葉、十九・二十・二十一号、四・七・十月）。黒岩駒男氏「『浜風爾…紐吹返』考」（巻三・二五一）（語文研究、四五号、十月）は、沢瀉説に対し「浜風の中にふき翻す」の意とする。この歌にはなお研究の余地があろう。佐藤稔氏「『波の行方』私見」（巻三・二六四）（解釈、四月）、沢瀉博士「ねには泣くとも色に出でめやも」（巻三・三〇一）（明日香路、五月）、大野晋氏「万葉集訓話新見」（巻三・三三七）（解釈と鑑賞、十月）、沢瀉博士「訓詁小見」（巻三・四〇三）（同上）もある。鶴久氏「万葉集における『者』字の用法――『中中者』の訓をめぐって――」（巻四・六一二）（万葉二十一号、十月）は、「者」の助字としての用法から「なかなかに」と訓むもの。大坪併治氏「いくひさゝ考」（巻四・六六六）

（同上）は、訓点語のきめ手から「いくひさゝも」と訓む論。菅野宏氏「何せむにまされる宝」（巻五・八〇三）（福島大学学芸学部論集、七号、三月）は、文構造から憶良の手法をするどく追求したもの。阪倉篤義氏「石をたれみき」（巻五・八六九）（解釈と鑑賞、十月）は、問題の「何の係り」についての提言である。古賀精一氏「ともにや来しと問はましものを」（巻八・一四七二）（九州万葉集と短歌の会、会誌、創刊号、三月）は、「問はまし」の言語の明確な把握。三宅清氏「地爾将落八方」（巻八・一六五三）（国語と国文学、二月）、山崎馨氏「心開而（巻八・一六六一）と地爾将落八方の訓み方――大野雍熙氏・三宅清氏の御教示に答へて――」（国語と国文学、十二月）は、「おちめや」「ちらめや」と「こころにさきて」「こころもとけて」の訓をめぐっての論。三宅氏の「の」についての論は従いがたい。穴山孝道氏「浦の島子（巻九・一七四〇）・鳴かましや（巻八・一四九七）」（九州大学分校、文学論輯、四号、十二月）で、後者は「や」を反語としない考である。内川昭子氏「万葉集『跡状』の訓について」（巻十一・二四八一）（愛媛国文研究、五号、三月）は、佐伯説に対し「たどき」とするものだが、傍証もよわい。清水克彦氏「万葉らしい訓み方――『極而』の場合」――」（巻十二・三一一四）（解釈と鑑賞、十月）、木下正俊氏「腫浪訓義考」（巻十三・三三三九）（同上）。次田真幸氏「東歌の語法の考察――『空よと来ぬよ』をめぐって――」（巻十四・三四二五）（国文、五号、七月）は、東歌の語法をこまかくしらべ、「空ゆぞ来ぬるよ」の意とする確論。鈴木正彦氏「『嶺に立つ雲を見つつ偲はせ』の解釈について」（巻十四・三五一五）（万葉集研究、創刊号）。過年度より問題の「志賀白水郎歌」（巻十六）で、国語学的知見の入ったものでは、高木市之助博士「用字法対文学論」（日本大学、語文、四六号、十月）は、助詞「て」の用法から憶良作と考え、福田良輔氏「志賀白水郎歌十首の歌謡性――憶良の単独創作説を疑ふ――」（語文研究、四五号、十月）は、その集団性についての新資料から単独説を疑ったもの。佐藤喜代治氏「服曾比猟」（巻一七・三九二一）（万葉、十八号、一月）は、古辞書などより「着襲ひ」とする精考である。以上読み来り、先学の、正しい「訓詁」の言葉が思い起されることである。

辞典・索引では、まず、佐々木信綱博士「万葉集事典」（平凡社、六月）の大著があった。旧著を一新し、篇中「歌語篇」の語釈は、林大氏の援助の功が大きかったと仄聞しているが、語学的な卓見にもとづいた解が施され、この学に大きく貢献する。なお「典籍篇」には資料が総観してある。蜂谷宣朗氏「万葉集読添訓索引――助詞の部(下)――」（万葉、十八号、一月）「同　補遺」（山辺道、二号、三月）があり、「総索引」でできない、その欠を補う貴重な労作。これによって、「万葉集読添訓の研究(一)」「同　二」（天理大学学報　二十輯、三月・二十二輯、十二月）があった。助動詞・助詞の読添の用法にきまりのあることから、その訓の当・不当を検したもので手がたい論考である。吉井巌氏「万葉集歌末索引」（大谷女子短期大学紀要、一号、三十年二月）は、歌末の語を品詞別に分類したもので、これまた「総索引」で検索しにくいこと、万葉研究に稗益を与えるものである。おはりに、上田英夫博士著「万葉集訓点の史的研究」（塙書房、九月）のあったことも附記しておきたい。

風土記には、河野亮氏「風土記の中の地名起源について」（音声学会会報、九十二号、十二月）は、地名伝説をもつ地名の音についてしらべたものである。佐藤四信氏「豊後風土記の研究」（明治書院、十一月）は、「肥前」「出雲」につづくもので、風記土研究によき一書を加えたものである。井上雄一郎氏「評註常陸風土記新講」（武蔵野書院）には、西野宣明本の影印があり、諸本の少い本書に有益である。琴歌譜には、武田祐吉博士「琴歌譜における歌謡の伝来」（国学院雑誌、五七巻三号、六月）は、その用字・用語をしらべ、さきの「全講」にはじめての訳解がある。賀古明氏「琴歌譜難語考」（上代文学、七号、七月）は、「はなふく」（鼻振るの意）「ふゝきのをとり」（雄鶏）についてだが、「ふゝき」の例証にはやゝ飛躍を感じる。霊異記には、常盤井獻麿氏「霊異記訓注の上代仮名遣――『国語学辞典』に質す――」（学習院大学、国語国文学会誌、一号、一月）は、へ・メ・モに書き分けなしとの論で、馬淵和夫氏の論（未定稿、二号）と併読すると一層の興味を覚える。増島一男氏「日本霊異記に現われた歌謡の訓釈」（解釈、十一月）もあった。

中　古

音韻では、宮嶋弘氏「『平安時代中期以前のハ行子音』続考」（立命館文学、一三七号、十月）は、「在唐記」の再検討から、h音であったことを主張するもの。服部博士のごとくを mellow だとする説もあり、ハ行音には問題はあるが、h音説にはなじめないものがある。

文法では、宮田和一郎氏「中古語法覚書（一五）歌語『なるらむ』『ざるらむ』」「同（一六）歌語（続）」（平安文学研究、十八輯、五月・十九輯、十二月）で、後者は「く」語法と「らし」についてで、例によって該博な引例である。宮田氏には、ほかに「解釈」誌上に、「助動詞『らし』と『めり』」（三月）。「用語の種別」（五月）は、「こ」「そ」について、「和歌と文法的破格」（六月）は、「見べし」など、「和歌における係結（その一）（その二）」（八月・九月）。「和歌と敬語（その一）（その二）」（八月・十月）は「ます」「います」などについてで、これらに論があった。同誌には、村井董直氏「和歌の係結考(一)――確定の係助詞について――」（未完）（十一月）、小久保崇明氏「係助詞『こそ』『そ』の強弱について」（五月）、村田鈴子氏「『まかる』について」（七月）などがあり、北条忠雄氏「『ざるは』所感」（平安文学研究、十九輯）もある。敬語では、今泉忠義博士「御しほたれ給ふ」（国学院雑誌、十二月）は、動詞に「み」のつくことなど、一例をあげるのもむずかしいことである。なお、前述の門前氏のにも論があった。語義では、力のこもったものが見られた。青島徹氏「『いづら』の語義語法」（国語と国文学、六月）は、「いづら」を「どうしたのか」の気持とみようという新見。石川徹氏「平安文学語彙考証（その二）――あちきなし・めざまし・いづら――」「同（その三）――おぼゆ・なつかし・くやし・ねたし・くちをし――」（平安文学研究、十八輯・十九輯）は、それぞれ克明な考証と語義があり、論中ニュアンスの相違を説いた「くやし・ねたし・くちをし」はとりわけ興味が深い。なお「いづら」には「どこ」の原義を強くみとめるもので、私は青島氏のにひかれる。原田芳起氏「共時態における意味の統一性―

―おぼろけに考――」（大阪樟蔭女子大学、樟蔭文学、八号、十月）は、問題の語「おぼろけ」を多くの用例から意味的に四分して明細な説明を施してある。古人もこんなに截然と区別して意識していたかの疑点はある。手島靖生氏「『すさまじ』考」（福岡学芸大学紀要、六号、十二月）は、この中古語の現代訳にあたって留意すべきことをのべたてたもの。犬塚旦氏「平安朝における『艶』の考察」（芸林、七巻三号、六月）は、すでに論のあったものだが、その意味・用法を一歩進めて検討している。同氏には、外に、「平安朝における『うるはし』の展開」（立命館大学、論究日本文学、五号、六月）、「『うるはし』と髪」（解釈、六月）「かど・かどめく・かどかどし」（同、十一月）がある。宮田和一郎氏「和歌と漢語・仏教語」（解釈、十一月）、浜千代清氏「『つれづれ』小考」（同、三月）もある。文章関係には、渡辺実氏「仮名文の初期――きり方・つなぎ方の文章法を中心に――」（国語国文、十一月）は、文のつづき具合をしらべ、各作品のちがいが述べてあるが、するどい手法である。井手至氏「和歌散文連接形式の変遷」（文学史研究、五号、十二月）は、和歌が前後の文といかにつづき、いかなる形式をもってかわるかの論。松山義夫氏「中古文の構造について」（国語国文、五月）は、その特徴を論理的でないことなどでとらえるものだが、新例がまたほしい。伴久美氏「伊勢物語の語法」（解釈と鑑賞、十一月）も、文体の特徴についてである。

以下各作品について見てゆく。（必ずしも時代順によってない）

源氏物語に関するものは万葉集についで多い。北山谿太氏「源氏物語のことばと語法」（武蔵野書院、二月）は、前著「源氏の語法」につづくもので、未発表のもの一、二を含み、十九篇を収める。源氏にみえる同用例から語義語法を定めて行ったもので、新見もあり、源氏研究者の一読すべき書。同氏には「源氏物語の語法くさ〴〵」（平安文学研究、十九輯）もあった。時枝誠記博士「源氏物語の国語学的研究」（国語と国文学、十月）は、読解にあたり心すべきことがのべてあるが、示唆を与える。文法では、中川浩文氏「源氏物語の助詞『だに』就いて」（女子大国文三号、一月）は、「だに」を類別し、用法などを調査したものだが、その数字的取扱いは、前稿「助詞接続計数表」をうけたものだけにくわしいものである。伊藤慎吾氏「助動詞ヌ・ツの特殊な用例の研究㈠・㈡――源氏物語に見えたものについて――」（解釈、十月・十二月）は、未完だが、動詞との承接をこまかにしらべている。木之下正雄氏「源氏物語におけるアンナリの解釈について」（鹿児島大学教育学部研究紀要、八巻、十二月）は、「あんなり」のもつ文脈で問題になるものをすべて推定「なり」と断ずるもので、解釈の機微にふれた好論である。ただし「ようだ」の訳語には抵抗を感ずるむきもあろう。今泉忠義博士「聞しめす御心まどひ」（国語研究、四号、三月）は、「御心地も動顛して」と訳す現代語とのずれを扱ったもので、適例による新見解が示されている。宮城文雄氏「『さま』の表現構造――源氏物語文体論ノート――」（徳島大学学芸部紀要、六巻、十二月）は、「さま」のもつ表現意識を精密な用例からさぐったものであるが、氏独自の文体把握にはついて行けないところもある。保坂弘司氏「源氏物語の一語法――解釈学への一つの提言と示唆――」（昭和女子大学、学苑、九月）は、「この」という語が、源氏では、感動的

場面に用いられることの多いことを見出だした卓説。桜井光昭氏「源氏物語における『こ』の用例」（解釈、一月）では、「こは」を扱い、関連がある。笹淵友一氏「女にて見奉らまほし」（語文研究、四・五号、十月）は、他作品などの例証により、源氏を女としての意とするものだが、反証もでよう。佐伯梅友博士「仕うまつりにくき宮仕にこそ侍れや」（東京教育大学、未定稿、三号、十一月）は、「こそ……れや」の型について、同博士「源氏物語末摘花の一節」（武蔵野文学、一月）もあった。中村洋子・関谷暁子両氏「造語上からみた名詞の研究」（東京女子大学、日本文学七号、十一月）は、基本的造語要素の調査・統計である。宮坂和江氏「『よ』と『や』――源氏物語について――」（解釈、一月）。宮田和一郎氏「何が語法研究を思ひ立たせたか」（同、二月）は「こそ……め」についてで、保坂弘司氏「源氏物語の語法」（国文学、一号、五月）（再録）もあった。敬語では、和田利政氏「源氏物語の『申す』」（国学院雑誌、十二月）は、「聞ゆ」との関係や「申す」の用いられる場面などについてで、氏の久しい調査になるもの、敬語研究に一寄与をなす。大西善明氏「源氏物語における『侍り』『給ふ』の用法について（消息文と会話文とにおける使用例の比較）」（平安文学研究、十八輯）は、副題の点を統計比較し、語り手・聞き手なども考慮した精考。土井忠生博士「平安朝の敬語の解釈」（解釈、二月）は、微妙な待遇関係を、宮田和一郎氏「動詞『まかる』について」（同、一月）は、「まゐる」との対応を認めないこと、同氏「敬譲語法の一考察」（同七月）は、「つかはす」などを、それ〴〵扱っている。語義では、犬塚旦氏「『ゆゑ』と『よし』」（平安文学研究、十八輯）は、近い意味をもちつつそれ〴〵特性があることを説き、同氏「再び『今めかし』について」（同、十九輯）もあった。なお、清水泰氏「桐壺の巻解釈の一試論」（同上）、宮田和一郎氏「飽かずあはれなるものに思ほして――桐壺の巻の一句――」（解釈、四月）、佐藤定義氏「太液の芙蓉未央の柳もげに通ひたりし容貌を」（同、七月）、石村正二氏「源氏物語解釈ノオト(一)・(二)」（同、十一月・十二月）もある。佐伯梅友博士「源氏物語註釈」（解釈と鑑賞、連載）は、解釈文法の一のあり方が示されている。おわりに、池田亀鑑博士「源氏物語大成」（全八巻）（中央公論社）が完成され、資料面で言うべきことはこの大著に尽されることゝなった。本年刊行の巻五索引篇（助詞・助動詞の部）（四月）には精魂を傾けられたよし。それにつけ博士の逝去に対し心からの哀悼の意を表わすものである。

竹取物語については、阪倉篤義氏「竹取物語における『文体』の問題」（国語国文、十一月）は、仮名文と訓読文との両文体をもつ本物語の性格を論じたもので、竹取研究史での大きな成果となった。藤堂尚氏「竹取物語の文章」（福井大学、国語国文学、六号、十一月）には、会話・数詞をとりあげてあり、塚原鉄雄氏「竹取物語の女主人公」（解釈、二月）は、山田博士説に対しては弱く感じられる。松本径子氏「竹取物語に於ける敬語について」（同、一月）、中川浩文氏「竹取物語私注(一)」（同、三月）もあった。宇津保には、安西迪夫氏「宇津保『立ちかへり』の和歌について」（解釈、一月）、原田芳起氏「嗣巡考――宇津保物語語彙考証」（同、二月）がある。堤中納言には、鈴木富美氏「『ある君達に忍びて通ふ人やありけむ』考――堤中納言物語『このつい

で』より――」（白楊社、国語研究、二十六号、九月）は、「君達」を問題にし、田中重太郎氏「『をんなご』考」（平安文学研究、十八輯）は「女児」とする精考である。佐伯梅友博士・藤森朋夫氏共著「堤中納言物語新釈」（明治書院・四月）は、前著「新解」の改訂版で、その文法的訳解には傾聴すべきものがある。

大鏡についての北西鶴太郎氏「大鏡用語の再検討」（福岡女子大学、文芸と思想、十二号、七月）は、「懈怠者」「四十たりの子」などの論であるが、まだすっきりしないものが残ろう。尾崎知光氏「大鏡二題」（解釈、二月）、富田正一氏「よみちもまかるべき」（同、八月）もある。

日記も多くとりあげられた。土佐日記では、遠藤嘉基博士「貫之の『文体と表現意識』――土佐日記の文章を通して――」（京都大学五十周年記念論集、十一月）は、この日記の文体に男子と女子と二つのつかいわけのあることから、貫之の意図を心にくいまで枯れた筆でほり下げたものである。池田勉氏「土佐日記ははたして貫之の作か」（成城文芸、六号、一月）や成宮正夫氏「『土佐日記』の文から」（滋賀大学、国語国文学、二号、十二月）もそれぞれ文体上関連のある問題があり、小原幹雄氏「『土佐日記』制作についての小論」（島根大学論集、六号、二月）も、万葉語との関係を説き、また関連していよう。蜻蛉日記では、原田芳起氏「蜻蛉日記私註(二)・(三)」（平安文学研究、十八・十九輯）は、すべて九語について綿密な考証を示したもの。柿本奨氏「蜻蛉日記本文整理試案撰記」（国語国文、三月）、「蜻蛉日記本文整理試案」（同、六月）、「蜻蛉日記考」（大阪学芸大学紀要、四号、三月）、「蜻蛉日記考」（平安文学研究、十八輯、六月）、「蜻蛉日記本文製定試案」（同、十九輯、十二月）があり、これら一連の論考は、語義などの面から本文批判をしようとするもの。柿谷雄三氏「『かげろふの日記』の『かなし』についての一報告」（同、十九輯）もあった。上村悦子氏による学習院大学本「かげろふの日記」翻刻（一部）（平安文学研究、十八輯・十九輯）があった。

紫式部日記には、神田秀夫氏「紫式部日記の『侍り』と消息文」（国語と国文学、十一月）は、消息文の文体から加筆を考えようとするものだが、武断めいたところもあろう。石村正二氏遺稿「紫式部日記の原形と現存形態(下)――いわゆる手簡部分について――」（国語　四巻四号、九月）にも「侍り」などの問題が提出されている。佐伯梅友博士監修、東京教育大中古文学研究部会編「紫式部日記用語索引」（日本学術振興会、一月）は、本文索引編（石井文夫氏）諸説篇（青島徹氏）などからなり、ていねいな索引と多くの卓見とから成っている。門前正彦氏「『聞きまがはさる』か『聞きまがはざる』か――打消の助動詞の連体形について――」（国語国文、十二月）は、同上書の批判で、青島説はやゝ疑わしい。和泉式部日記では、遠藤嘉基博士「新講和泉式部物語（十二）（十三）（十四）（十五）」（国語国文、二月・三月・四月・七月）で、「まことに」「いとあかし」「歌とひびきあい」「なにか・なにかは」を扱い、表現と解釈の問題を提起している。川瀬一馬博士「和泉式部日記」（講談社、五月）は寛元本である。更級日記では、鍛冶初江氏「更級日記『いかまほしく思ふ』について」（帝塚山短期大学研究年報、三号、一月）は、この「に」を同じような用例から順接とする説。村井順氏「更級日記の解釈上の疑義について」（早稲田大学、国文学研究、十三輯、

三月）には、十一例にわたっての説明がある。渡辺宏氏「更級日記の文体」（山形大学、国語研究、八集、二月）は、語法などから性格を探るもの。東節夫・塚原鉄雄・前田欣吾三氏共編「更級日記総索引」（武蔵野書院、四月）は、本文もあり、御物本の検索もできる行きとゞいたもので、三氏の労に深甚の謝意を表わしたい。平仲日記には、雨海博洋氏「平仲物語解釈上の二三の私見」（早稲田大学、平安朝文学研究、創刊号、十二月）は、文法的なところもある。

枕草子には語釈が多かった。伴久美氏「枕草子の副詞の一、二について」（解釈と鑑賞、一月）は「さらに」「はた」の二語について。萩谷朴「三巻本枕草子の解釈に関する新見三つ」（同）、小沢正夫氏「枕草子解釈新見」（同）、田中重太郎氏「枕草子『おひこる』『おひひろごる』考」（平安文学研究、十九輯）、佐藤喜三郎氏「枕草子に於ける『をかし』『あはれ』について」（同）、渥美功氏「『えならず』考――その貶称か美称かの問題――」（解釈、十月）、内田暁郎氏「枕草子の『いと寒きに』」（同）、熊谷直孝氏「枕草子の解釈おぼえがき㈡」（白楊社、国語研究、二十五号、二月）などがあった。田中重太郎氏編著「校本枕冊子　下巻」（古典文庫、三月）は、上巻（二十八年）上梓以来、学界鶴首の書で、群小の論文よりなにほどか有難いもの。その続刊を思う時、田中氏の御摂養を切に祈るものである。

歌集では古今集が中心である。橘誠氏「古今和歌集和歌語彙の文法的考察――㈠用言について――」（国学院雑誌、十二月）は全用言をしらべあげたもの。安田喜代門博士「助詞『が』の研究――勅撰集の詞書の中から――」（同上）は、格助詞「の」「が」の主格・連体格としての用法を古今・後撰についてしらべてある。佐伯梅友博士「なにはのうら」（東京教育大学、国語、四巻三号、六月）は、この難解歌（九七三番）を「その手はくはな」式に好例をもって考えたもの。田島光平氏「秋萩にうらびれをれば　㈠・㈡」（解釈、七月・八月）は、二一六番についての新解だが、私はまだ旧説になずむ。宮坂和江氏「『毎に』ということばについて――解釈の問題――」（文学語学、二号、十二月）は、二五一番の歌を文法的に考えて「異に」の意とするもので、前年秋永一枝氏はアクセントから同説だった。ほかに、石田肇氏「反語と同資格を有する疑問表現」（滋賀大学、国語国文学、二号、十二月）の「か」についての所論や、浅見徹氏「古今和歌集の仮名序について」（文学史研究、四号、九月）、宮田和一郎氏「古今集私解」（平安文学研究、十八輯）があった。

訓点語関係には、まず、春日政治博士「古訓点の研究」（風間書房、六月）がある。訓点資料ならびに訓点語に関する論考二十二篇が集められている。その発表年時も三十年になんなんとし、発表当時すでに学界に重きをなしたものが多く、また名のみ聞いて繙読できなかったものも含まれている。ひろく、国語史研究者にとって必見の書である。各資料の紹介についてみると、鈴木一男氏「聖護蔵御本成実論巻十一天長五年点訳文稿」（書陵部紀要、六号、三月）・「聖護蔵御本成実論巻十六天長五年点」（奈良学芸大学紀要、五巻三号、三月）は、加点年代の知られる最古のもので、資料価値もきわめて高い。過年度は、巻十三・十八についてあり、本年も二巻にわたる精密な訳文稿で、完遂が望まれる。大坪併治氏「山田本妙法蓮華経方便品第二古点」（国語国文

六月）も、「成実論」と同じく、中田祝夫氏の第一群点に属する平安初期のもので「法華経」の訓点としても最古のもの、その適切な概説である。これには、築島裕・小林芳規両氏「故山田嘉造氏妙法蓮華経方便品古点釈文」（訓点語と訓点資料、七輯、八月）と大坪併治氏「山田本妙法蓮華経方便品第二試案」（同）との二つの解読文の同時発表があったが、固定して訓まるべきところに、違いがでるということなど、彼此の学をも示すもので、傍目ながらきびしい。大坪氏「石山寺本大般涅槃経の訓点（上）」（島根大学論集、六号、二月）は、未完だが、例の克明な調査。「石山寺旧蔵妙法蓮経玄賛巻第六の訓点」（訓点語と訓点資料、六輯四月）は、春日博士の研究のあったものの再調査であり、大坪氏の活躍はめざましい。稲垣瑞穂氏「東大寺図書館蔵百法顕幽抄の古点について」（訓点語と訓点資料、七輯）も、平安初期のもので、部分的には紹介もあったが、全般的のよき解説である。築島裕・小林芳規両氏「南海寄帰内法伝の訓点」（ビブリア、七号、十月）は、大坪氏に調査のあったものだが、その再調査。築島裕氏「興福寺蔵大玆恩寺三蔵法師伝古点」（東京大学教養学部、人文科学科紀要、九輯、六月）は、全十巻、院政切期に加点されたものである。この厖大な資料についての概説で、新見も多く、まさに類稀な労作である。これにもとづき「訓点語彙の一考察」（国語学、二十七輯、十二月）は、この全語彙を源氏とくらべてその位相をたずねたものであり。春日和男氏「『也』字の訓続考――『なり』の表記としての『也』字――」（九州大学、文学研究、五十四輯、三月）は、「也」字の訓の定まった経過を三宝絵などから例証したもので、年来手がけているだけに深まり行く卓論である。小松英雄氏「モダスの活用」（未定稿　三号）もあった。仮名字体では、曾田文雄氏「仮名字体の伝授」（国語国文、二月）は、「ス」の仮名についての試論、水田紀久氏「神田本白氏文集仮名字体補正」（訓点語と訓点資料、七輯）も、綿密なことであり、ともに有益なもの。遊仙窟には、平井秀文氏「成簣堂文庫本遊仙窟について」（語文研究、四・五号、十月）は、長年遊仙窟とともにある平井氏による紹介だけにその発言は今後の研究に重きをなす。吉田金彦氏「和訓からみた遊仙窟」（国語国文、七月）は、諸本の訓の比較考証によるもので、出色の論。小島憲之氏「遊仙窟の傍訓をめぐって」（訓点語と訓点資料、六輯）は、醍醐寺本などの訓を語例とするにあたり留意すべき点を説く。これらの諸研究を見るにつけ遊仙窟諸本の大成が望まれることである。索引類では、吉田金彦氏「図書寮本類聚名義抄和訓索引」（油印本、一月）は、声点までつけた労作。ほかに、木下正俊氏「大般若経音義倭訓仮名索引」（油印本）、中田祝夫氏「文華風月至要抄所載の類聚名義抄佚文」（訓点語と訓点資料、七輯）、小林芳規氏「東大寺図書館蔵法華義疏紙背和訓索引」（同）があった。牛島徳次氏「助字考――宋代以前――」（東京教育大学紀要、国文学漢文学論叢、二月）は、漢籍における助字の用語例を博捜してあるが、訓読研究にとってもまことによき参考となろう。藤堂明保・近藤光男両氏「中国古典の読み方――漢文の文法」（江南書院、六月）には、「訓読の歴史」「日本に伝わった漢字音」があり、また参考となる。鈴木一男氏「『古点本の国語学的研究』を読む」（国語と国文学、十二月）は、この大著に対してはまだ〳〵言い足りぬことである。

中　世

音韻では、吾郷寅之進氏「近古に於ける語頭濁音の『候ふ』」（文学、五月）は、「候」が濁音であらわれる場合を精査し、それから他の清濁をも決しようとの論であるが、根本資料のとりあげ方に難があろう。文法では、石井文夫氏「中世の疑問助詞『や』について――文のなかにあるばあい――」（未定稿、三号、十一月）は、疑問助詞「や」が「か」の領域を犯して行くことなどをしらべてあり、大塚光信氏「ウズとウズル」（国語国文、九月）は、室町時代の「うず」「うずる」がどんな資料にどう変化してあらわれるかを考察したもので、着想も新しく例証もよい。なお、佐藤喜代治氏「漢字と国語」（文部省、国語と国語教育、十一月）は、中世における漢語の問題がとりあげてある。

梁塵秘抄では、藤田昭夫氏「院政時代の下一段活用動詞考――梁塵秘抄に現われた――」（秋田大学、国語国文学紀要、三輯、三月）は、下一段活用動詞をさがしたもの。萩谷朴氏「梁塵秘抄今様歌異見」（国語と国文学、二月）は、十七首がとりあげてあり、若林芳樹氏「『ほうなきもの』『てごう』考――方言による古語解釈例――」（白楊社、国語研究、二十六号、九月）もある。

宇治拾遺については、森野宗明氏「本位田重美氏『宇治拾遺物語における蔑称の『が』について』を読む」（未定稿、三号、十一月）は、例の蔑称をあらわすという「が」について今までにないするどい批判である。

平家物語では、山田俊雄氏「真字熱田本平家物語の文字史的研究の序――附『無実の罪』『かなびく』私見――」（成城文芸、七号、四月）は、異体字宛字などを新しく見直すとともに、二、三の語を発掘したもので、この犀利な方法による真名本研究は意義深いものがある。宮坂和江氏「平家物語の詞章について――語り本を中心に――」（実践女子大学紀要、四集、一月）は、係り結び・同一文句のくりかえし・会話・歌の挿入などについての考察で、氏の一連の文章研究につながるものである。富倉徳次郎氏「追立の籌使考」（解釈、七月）は、語彙についての新見、同氏「六代御前物語――初期平曲の台本――」（駒沢大学研究紀要、十四号、三月）は、資料紹介である。高橋貞一氏「平家物語の解釈」（国語教室、一巻三号、四月）、江湖山恒明氏「平家物語の文体と語法」（国文学、一巻五号、十一月）もあった。市古貞次博士「平家物語註釈」（解釈と鑑賞、十一月・十二月）には、清濁などに深い考慮がある。方丈記には、河崎正之氏「方丈記と漢文訓読的表現」（福井大学、国語国文学、六号、十一月）は、他の訓読文と比較してある。

三帖和讃では、多屋頼俊博士「三帖和讃の本文について」（大谷学報、三五巻四号、三月）は、十年前、梯俊夫氏の研究もあったが、その厳正な本文批判から新たに語学的な問題に論及したもので、その発展が望まれる。榎克朗氏「再帰的助動詞『しむ』――シンラン研究のついで――」（大阪大学、語文、十七輯、七月）は、親鸞の「自ら……する」気持の「しむ」を説き、その用例や起ったわけなどをくわしく考察したものであり、赤松俊秀氏「教行信証（坂東本）について」（史林、三九巻六号）は、資料の上で参考となる。親鸞・道元では、菊地良一氏「親鸞・道元の表現――東国的と思惟的について――」（言語生活、九月）で、副題の東国的は、方言意識史の問題でもある。鏡島快隆氏「道元

禅師の漢文の読み方」（駒沢大学、東洋学研究、十二号、十二月）は、その語法的特徴と見られるものを六、七語につき深くしらべたもので、研究の少なかった分野である。松本寧至氏「増鏡『草枕』に於ける註釈の一訂正」（上毛国語、十号、六月）、細谷直樹氏「無名草子註釈上の疑義二・三」（解釈、十一月）もあった。

徒然草には、虫明吉治郎氏「徒然草の『侍り』」（解釈、四月）、木之下正雄氏「徒然草の読点三例」（同、六月）原田芳起氏「『名聞ぐるしく』の意味」（同、十月）があった。川瀬一馬博士「『けてう』考」（解釈、十月）は、世阿彌の用語についてである。歌謡では、浅野建二氏「田植草紙論」（山形大学紀要、三巻三号、三月）は、「田植草紙」に中世語法の残存していることを証明し、吾郷寅之進氏「宗武小歌集の編者と成立時期の問題」（奈良学芸大学紀要、五巻三号、三月）には、国語学的な問題も見える。

キリシタン関係では、土井忠生博士「ロドリゲスの日本語動詞活用論」（文学語学、二号、十二月）は、先行のアルヴレスの文典と対比しながらその動詞の扱い方をしらべてある。土井博士ならでは手のつけにくい問題で、旧著に加わる一業績である。島正三氏「文禄四年天草版拉葡日対訳辞書の編纂の過程について――その対訳のしかたの統一性と多彩性とからみる――」（言語研究、二十九号、三月）は、要旨ではあるが、新領域を開こうとするもの。同氏「キリシタンの辞書にみられる生物の呼称　続稿(三)」（東京農業大学、農学、七月）は、その分類の仕方などについて「日葡辞書」などの特徴をさぐったもので、細かいことではあるが、基礎的作業である。清瀬良一氏「天草版平家物語における会話引用の言いかたについて」（広島大学、国文学攷、十六号、十月）は、「仰せらるる」「いはるる」「ある」などが巻々によってちがうことを確証したもので、この物語の成立事情への手がかりの一を得た。井上章氏「天草本平家物語の翻字について」（言語研究、三十号、九月）も、要旨だが、亀井高孝本への言及がある。森田武氏「はんべん考」（三省堂、学校通信、七月）は、「はんべい」（半平）語源説をキリシタン本などから否定するもの。河野亮氏「自称代名詞の交用」（解釈、十二月）には、懺悔録などを引き、助野健太郎氏「『どちりな・きりしたん』考」（関東学院、六浦論叢、五輯、二月）には、あまり国語学的なことは考察してない。富永牧太氏「『こんてむつすむん地』の版式について」（ビブリア、七号、十月）は、天理本をかぶせぼりとの推論。大塚光信氏「『ロドリゲス日本大文典』を読んで」（国文学攷、十五号、三月）もあり、矢野文博氏「『現代かなづかい』私案」（語文研究、四五号、十月）にはキリシタン本の引用もある。資料では、井上章氏「天草本平家物語巻第四」（原文・翻字対照）（油印本、六月）で、本文篇が完結した。高羽五郎氏による翻刻の功績ははかり知れない。本年は、「コンテンツスムンヂ」（原文篇）Ⅱ・Ⅲ（五月・十月）が完結した。翻字は姉崎正治博士によるものがあるが、原文ははじめてのもの。「ロザリオの経」（翻字篇）Ⅰ（未完）（八月）も、一六二二年版・二三年版対照のはじめての翻字である。

中国関係では、浜田敦氏「日本風土記山歌註解」（京都大学文学部五十年記念論集、十一月）は、今まで読めなかったもの、誤読のものを解読したものだが、中世国語・中国語などにあり余る

学識が駆使してある。これは、氏の卒業論文以来手がけていることで、まったく追従をゆるさない。

抄物では、寿岳章子氏「擬声語の変化」（西宮大学学術報告、人文、七号、三月）は、抄物などの擬声語の特徴をとらえ、副詞的なものに変質したりする様などを論証したもので、抄物研究の新生面を示したもの、拙稿「否定の『ばや』について」（未定稿三号、十一月）は、史記抄の語法などを扱ったものである。

能狂言では、学界渇望の天正本の紹介翻刻があった。表章氏「『天正狂言本』について」（文学、七月）、古川久氏「狂言集下」（朝日新聞、日本古典全書、一月）は、本文が要点の部分的書留めいた所はあるにせよ、虎明本を溯る現存最古のものとして中世語研究に一資料を加えたのである。荒木良雄氏「狂言本本文定着の問題——鉄砲の語に関して——」（甲南大学、文学会論集、四十月）は、時代語鉄砲が、諸本にいかに反映したかという精密な論で、国語史的にも一問題である。

なお、資料関係をあげると、山田忠雄氏「揚守敬旧蔵本将門記の研究（一）」（日本大学、語文、四輯、十一月）は、従来の「真福寺本」一辺倒に対し「抄本」「揚守敬旧蔵本」との比校を九本につき試みたものであり、国語学における書誌的方法はいかにあるべきかの一模範を示している。田中章夫氏翻刻「法隆寺蔵『法華修法一百座聞書抄』」（未完）（未定稿、三号、十一月）があり、「宗性上人年譜　第二集・第三集」（宗性上人研究会、五月・八月）は、法勝寺御八講問答記を中心に収載したもので、中世語研究上逸せない。築島裕氏「法華経音訓和訓索引」（訓点語と訓点資料、六輯、四月）は、心空のもので利用価値大きく、川瀬一馬博士「新札往来と尺素往来——古往来の研究（其の一）——」（青山学院女子短期大学、紀要、五輯、三月）は、石川謙博士の研究もあったが、新資料の紹介で、国語学上にも有益なもの。お伽草子では、島津久基・市古貞次両博士「続お伽草子」（岩波文庫、四月）は、従前の文庫本には見られぬ国語学的考慮を払ったものであり、藤井隆氏「御伽草子集と研究（一）」（未刊国文資料刊行会、二月）には、五篇の翻刻があり、「みなつる」（国文論叢、四巻一号、十一月）もあった。市古博士のは「古典文庫」（前述）にも見られる。森武之助氏「中世文学文献報告　其の一」（中世文学、創刊号、五月）は、幸若舞についてである。連歌論では、伊地知鉄雄氏「連歌論集　下」（岩波文庫、四月）や「古典文庫」（前述）のものが見られ、ともに従来たやすく披見できなかったものが含まれている。

近　世

俳諧関係では、山田孝雄博士「俳諧文法概論」（宝文館、十一月）は、九百頁の大著、類書もあまりなかったものである。博士の文法体系にしたがって芭蕉から鬼貫までの例句があげられ、爾後俳諧文法を云為する際必ずひもとくべき書である。たゞ「七部集総索引」のある現在どう活用されることゝなるだろうか。高羽四郎氏「助詞『て』の用法——俳諧の用例に拠って——」（静岡女子短期大学、紀要、三号、十二月）は、俳書に見える接続助詞「て」のいろ〳〵な様相や意味的推移をこまかくしらべたものであり、山田博士の前著と関連するところもある。富山奏氏「芭蕉に於ける『けらし』の用例と其の意味」（連歌俳諧研究、十一号、

三月）は、「けらし」即「らし」説に対し「けらし」即「けり」説を主張するもので、私には、甲乙つけにくいことである。浅野信氏「芭蕉の表現意識――その表現と表現意識との関係――」（相模女子大学紀要、一号、二月）は、活用語や「けらし」などの文法的特徴ものべてあり、小嶋孝三郎氏「一茶と写声語」（立命館大学、論究日本文学、五号、六月）は、氏が長らく従事している擬声語研究の一成果である。吉田辰次氏「俳句の『や』の解釈法について」（蒼明、八、二月）、三浦寿緑氏「『や』雑考――奥の細通の句を中心として――」（大修館、高等国語教室、十号、十二月）もあった。

川柳では、根岸川柳氏「古川柳辞典　第二巻」（日本新聞社、七月）があり、山沢英雄氏「誹風柳多留　五」（岩波文庫、二月）が完結したが、旧著を全く組みかえた精密な翻刻で、その索引は便利である。

西鶴では、杉本つとむ氏「西鶴作品の国語学的考察（一）」（西鶴研究、九集、十一月）は、自称対称の代名詞を精細にならべあげてある。長沢良子氏「西鶴の接続助詞小考」（京都女子大学、四号、七月）は、その接続助詞を統計・比較したもので、接続助詞「て」が特に多く出るのは西鶴には限らないとの論である。東明雅氏「『江戸つゞきて』攷――日本永代蔵の本文誤読につきて――」（西鶴研究、九集）は「江戸はつきて」の誤りとするもの。岩見順子氏「西鶴『五人女』の文体に関する一考察」（福岡女子大学、香椎湾、創刊号、十一月）は、文体特徴を探ろうとしている。前田金五郎氏「西鶴語彙考証（六）」（西鶴研究、九集）は、九語について、「江戸時代語二三」（近世文芸、三号、五月）は、西鶴・近松などの七語について、いつもながらの博引旁証のもので、語彙史研究に益すること多大である。辻昭五氏「西鶴用語『才覚』の意味と内容性」（滋賀大学、国語国文学、二号、十二月）もあった。東明雅氏校訂「日本永代蔵」（岩波文庫、九月）は、精密なもの、なお、三都版（古典文庫）もあった。

その他では、安藤唯夫氏「二人称転化の『あなた』をめぐって――洒落本例を中心として」（早稲田大学、国文学研究、十三号、二月）は、要旨であり、佐藤茂氏「『ばかり』小考」（連歌俳諧研究、十二号、九月）は、近世における「ばかり」の意味、用法をならべたてである。為貞節穂氏「逆接助詞『が』『けれど（も）』」（解釈、五月）には、江戸語の言及があり、斯林不二彦氏「『古今百馬鹿』の接続助詞『が』――『が』による文展開試論――」（蒼明、九号、五月）、久富哲雄氏「奥の細道『百代の説』」（解釈、八月）もあり、安田喜代門博士「詞と辞」（言語研究、二十九号、三月）には、浄瑠璃本を引いている。小林好日博士遺稿「仙台方言集『浜荻』について」（国学院大学、国語研究、四号、三月）は、江戸語彙と対比したもので、博士の遺著「方言語彙学的研究」につながるものとして意義ある論考であり、金田弘氏「雑兵物語に見られる用言をめぐって」（同）は、資料の少い東国語研究に一論を加えたものである。

資料では、河竹繁俊氏校訂「東海道四谷怪談」（岩波文庫、八月）高羽五郎氏翻刻「譬喩尽　五」（三月）（未完）などがあった。

近代

松村明氏「『ませんでした』考」（国文、六号、十二月）は、東京語「ませんでした」の用法や発生の時代を究め尽して残すところのない論であり、田中章夫氏「近代東京語質問表現における終止形式の考察――その通時的展開について――」（国語学、二十五輯、七月）は、質問形式の変遷を統計・図式的に論じたもので一テーマに対してかくもこまかい調査は従来例のなかったことである。伊藤正雄氏「『学問のすすめ』の用語について（一）（二）」（解釈、十一月十二月）は、漢語の問題に関している。鈴木二郎・氏「聖書の言葉のうつりかわり」（言語生活、九月）は、天保のガツラフ訳以来の推移を資料により示してあり、笹淵友一氏「聖書和訳史とその文学的影響」（文学、五月）とともに翻訳語史研究に参考となる点が多い。

資料では「真景累ヶ淵」（岩波文庫、六月）があった。

――都立南多摩高教諭――

前号要目（第二十九輯）

詞と辞とを区別する規準について……長船省吾

和訓に施された平声軽の声点
――平安末期京都方言における下降調音節の確認――……小松英雄

知恩院蔵本
大唐三蔵玄奘法師表啓古点の研究……山田忠雄

アクセント論のために
――金田一春彦氏に答える――……柴田武

〔入門講座〕

音韻論（三）……服部四郎

〔書評〕

時枝誠記博士著
「現代の国語学」の書評によせて……浜田敦

Fujiwara(Yoichi)
A Dialect-geographical Study of the Japanese Dialects……W.A. Grootaers

国語学会事業報告・学界消息

国語学会会員名簿